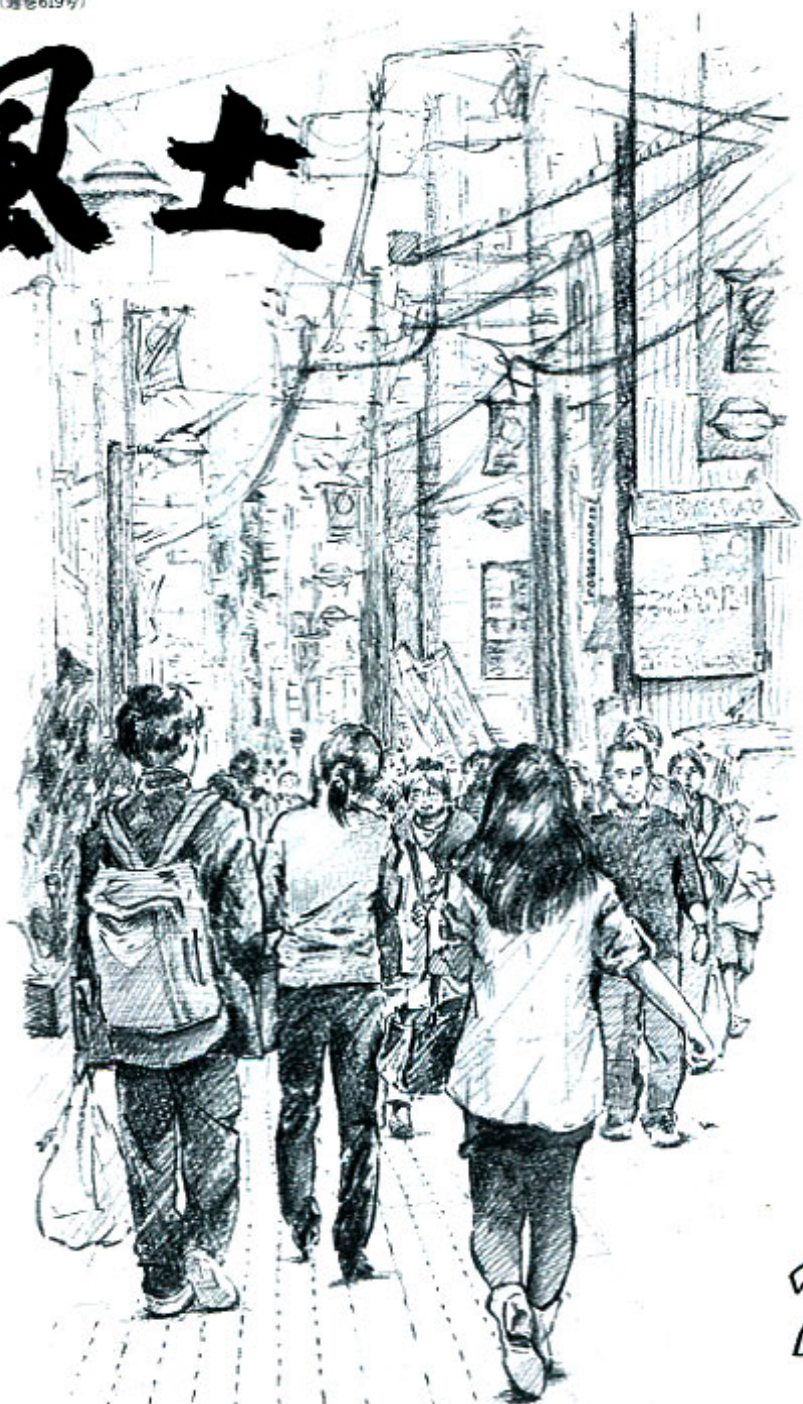


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻2月号(通巻619号)

風土



2

雪 迎 へ
神 蔵
器

去年今年うしろ姿の火を焚けり

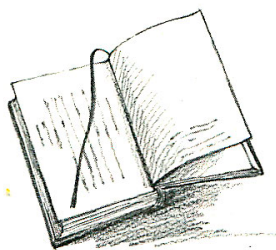
川一つとび越し一夜飾かな

花八っ手父に遺書なくわれになく

本郷の文人マッヅ冬の鴉

妻の忌や○時の交響曲第九

みちのくの底ぬけ晴や雪迎へ
桂郎の赤きセーター畔跳んで
十二月雑沓にゐて目の渴く
不意打ちの葱鉄砲や漱石忌
ぬきん出て拈華微笑や冬薔薇
たつぷりと寒肥あたへ牡丹囲ふ
年を越す生一本なる唐辛子



竹間集

同人作品



畳に割つて

南 うみを

茶の花や道を濡らさぬほどの雨
檻罌の中へ落葉のしきりなる
玉葱の前起ちあがる霜夜かな
枇杷咲いて丹後は雲の混み合へる
種枯れ海のひかりのひたひたと
まう船の着かぬ棧橋かいつぶり
短日の畳に割つて広辞苑

雀は雀

島谷 征良

白芙蓉夜は拳のかたちにして
やや寒の蓬は下葉なかりけり
草の実や雀は雀鳩は鳩
松茸や広き加奈陀のいづこより
熱気球いくつも容れて天高し
身に入むや灯を明うして古句読めば
鳥渡る二川合流するところ

小六月

大竹 淑子

冬立つや湖へ真直ぐに道通す
鯁いくつ湖へ突き出し時雨けり
火点して「縮緬街道」時雨けり
法螺の音の遠のきお火焚祭かな
下嵯峨（鹿野院二可）の寺に開かずの白障子
茶の咲いてねんげ微笑の釈迦と弟子
地に低く跳ぶものありて小六月

青 鷹

宮川みね子

短日の五重塔に入りにつけり
守護神の伐折羅大将冬の立つ
まほろばの餅日和や青鷹
春日野の鹿遠ざかる初しぐれ
鐘の音の一つに釣瓶落しかな
冬蝶の空にしづけさ極まれり
朝粥のおかはり京の小春かな

神迎へ

浜 福恵

連衆（一）に十一月の山の水音
日当（二）たり（三）に冬芽はぐくむ娑羅双樹
薪積みて軒のふくらむ小六月
風呂吹やうれしきことに涙して
解禁を告ぐ空砲や時雨雲
波郷忌の月の明りに夫の椅子
雨音は空耳なりし神迎へ

烏 瓜

鈴木とおる

明け方に吹き納まりて神渡し
短日や一人の家の鍵の穴
分校の下校は早し石路の花
初霜に甘くなりたる大名葱
子を見舞ひバス待つ列に冬めける
書きとほすつもり（一）の三年日記買ふ
東司借る 駆込み寺の烏瓜

炉ばなし

外川 玲子

冬めきて空全開す妙義山
掌にかこふ蒼きいのちの雪蚩
炉（二）ばなし（三）の天明の世へみちびかれ
山小屋のペンキの匂ひ落葉松散る
烏瓜一つのこりし杳さかな
地に近き光の中の雪蚩
北国街道みちまつすぐに木枯す

冬日射す

— 鈴木 石花 —

山茶花や行く先々に東歌
恋の碑をなべてなぞりし冬木の芽
陶句郎より辰砂の茶盃成道会
石段の二人指組む返り花
『不如帰』蘆花逝きし部屋冬日射す
干支となるラビットランド年用意
一人泊つ湖畔の宿や冬火花
恒例の年末シャンソンディナーショウ
シャンソンの「恋人」に酔ふ爛熟し
枯野来て手拭染めし黄金の温泉

山河集

同人作品



神蔵
器選

青丹よし奈良の飛火野草紅葉

小林和子

野に跼む膝より低く返り花
露店の灯家路に続く夷講
蛇穴に城垣温む五万石
鳥渡る空整ひて湖中句碑

「在釜」てふ城下の町の萩の秋

山本町子

新しき箒で寄せる柿落葉
笹蝶焼いてひとりの夕時雨
父と子のピアノ連弾冬の星
土井勝二世に学ぶ鱒大根

秋麗の堂宇へ真直ぐ仏みち

林いづみ

風韻の柿葺反り一葉落つ
源義忌運ぶ男波の怒濤音

あひみての旅はみちのく後の月
紫蘇揉みてよりの無国籍料理かな

中根美保

家ごとに小橋ひとつや冬紅葉
実南天光る雨滴をとどめけり
冬の日や句帳のほそき栞紐
丸窓の隅に庭師や冬ぬくき
雑木山ときをり冬の蝶放つ

佐野つたえ

そここの物みな遺品秋の風
エプロンに摩り切れのあり文化の日
椋鳥のねぐらの脇を急ぎ過ぐ
住む人の去りゆく庭に枇杷の花
十二月銀座通りに僧立てり

雪の道

根岸 善行

店に入る雪の小さき橋渡り
好々爺・女将に雪の客一人
昔色街の裏口雪の声
雪吊の支へ柱も夫婦松
降りだすや雪吊支へ柱より
沖遙かより立上る冬の波
雪起し海を離るる波頭
むらさきの新雪七堂伽藍かな
老いの手を取りあひてゆく雪の道
大氷柱襖小さき出入口

風土独語／神蔵器



魚の目に泪の光る寒さかな

近藤幸三郎

千住界限吟行の所産のようである。千住といえは芭蕉の奥の細道の首途の地として有名で、芭蕉の旅立ちから百三十一年後に建てられた「首途の碑」には「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の句の一部は剥落しているが、芭蕉の肖像ははつきりしているという。さて、掲出句であるが、問題は「魚の泪」である。作者の発想の原点に芭蕉の句の「魚の目は泪」があったことはたしかであろう。と、いつてそのことをとやかく言うつもりはないし、掲出句のよさも充分認めているつもりである。ただ、この際写生ということについて少し考えを述べてみたい。

芭蕉の「魚の目は泪」は「鳥啼き」に対する「水中の魚の目さえ涙にうるんでいることよ」と相対的な文学の修辞であるが「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」であって、芭蕉の離別のおふれる泪の感情移入なのである。従ってそこに鳥や魚が居なくても、芭蕉としては同じ命に根ざす生きている鳥であり、生きている魚でなければならぬ。

作者の句は「泪の光る寒さかな」と具体的に把握しているので、眼前に生きている魚ととれる。まさか魚屋の店頭で売られている

魚ではないであろう。写生の原点が希薄である。

さらに加藤楸邨の

雉子の眸のかうかうとして売られけり

を上げてみよう。鳥類はいったん死ねば瞳が下って、とても「かうかう」たる輝きなど失われてしまっている。楸邨の雉子ははたして生きているのか死んでいるのか、いやいやこの雉子は剥製であろうなどと喧々譁々となった。桂郎は何度か楸邨に手紙を書いたが楸邨からは梨の礫であつたそうだ。

その後、何年かして大岡信先生が「折々のうた」に取り上げられ、「昭和二十年敗戦直後の作で、これは闇市の冬の雑踏に吊るされてでもいた雉子だろうか。囚われて殺され、売られている美しい目の鳥。死んでもなおきらきらと輝いて虚空を凝視しているその瞳。作者の胸にこたえるものがあつたのは、彼にも憤るべき多くのことがあつたからではないか」とあつた。

雉子はすでに息絶えている。しかし楸邨の雉子はかうかうと鋭い眼光を放って生きている。

鬼女となる熱湯に菊投げ入れて

山本 浪子

食用菊は東北地方や新潟地方が主な産地である。新潟では「かきのもと」。同じ品種のようだが中越地方では「おもひのほか」と言われている。私が羽黒山の全国大会で、はじめていただいたおしたしは山形地方の特産「もつてのほか」ということであつた。作者は知人からかなり沢山のもつてのほかを送ってもらつたようだ。料理は大きめの鍋で湯をわかす。そして鍋の湯が沸騰するまでの間に、菊の花をむしり、ていねいに花片をほぐす。ほぐし

た菊のはなびらが旅にいっぱいになる頃には、鍋の湯も沸騰して来る。そこで少量の酢を湯におとし、筍の菊を大きく掴んでは一気に沸騰する湯の中へ投げ込む。サツと短時間で茹で上げ、すぐに真水に晒す。あとはわさび醤油で食べようと、おしたし、三杯酢にして食べようと好み次第である。

彼女は美しいゆえに、さらに美しい菊の花を熱湯に投げ入れてあやめる暴挙に悲しみ怒りながら、どこかで何故か快哉している女の一面を見てしまったのではなからうか。(以下略)

風土集



神蔵器選

千住や師走日和の橋袂 横浜

近藤幸三郎

綿虫舞ふ腑分けの寺のしじまかな

寒鯉や投師なげしは笹屋善次郎

魚の目に泪の光る寒さかな

お化け煙突在りし辺りは時雨けり

一葉忌手早く結ぶ「貝の口」 川崎

山本浪子

鬼女となる熱湯に菊投げ入れて

仙石線海の色もつ野菊かな

乾くなか一つは重し烏瓜

迫り来る開演時間初時雨

今朝の冬顔を小さく洗ひけり 川崎

直井たつろ

冬麗の海に張り出す朱の鳥居

木の実降る皇女降嫁の石畳

御陵衛士屯所の跡や冬桜

刻告ぐる大覚寺の鐘木の葉散る

ノック音生むボールペン冬隣 藤枝

間島あきら

名草枯る多聞櫓にのみ跡

小鳥来る駿府御城の惣指図

鷹匠町の空の碧さよ冬に入る

秋惜しむ十八の碑のしんがり

胞衣塚や一茶のたんぼ返り咲く 福生

雨宮桂子

かなちらすおほてらにゐて初しぐれ

初霜や春日の巫女の薄化粧

冬ざくら勢至菩薩に逢ひにゆく

辿り着く西行庵の冬紅葉

一僧のうしろを通る焚火かな 高槻

浅田光代

冬紅葉四角の窓に坐してをり

綿虫や山のこどもは山を見て

巡礼宿塀に太葱立てかけて

ガラス戸にぶつかりくるや冬の蜂